

「庭に住まう」視点で美しい街並みをつくる そんな時代を迎え、私たちの役割はさらに重要に



庭園都市計画家の白井隆氏、
ガーデンデザイナーの白井温紀氏に
お越しいただき
三協アルミの永田等本部長を交えて
行われた新春座談会。
建築家、デザイナー、メーカー、
それぞれの立場から
エクステリアへの想いや抱負が語られ、
なごやかな雰囲気の中、
熱い庭談義が続きました。

庭園側から発想して建築をデザインする。
庭園のために景色を変え、ストーリーの文脈を変える。
お客様はそれを待っていたんです。



庭園都市計画家
白井 隆氏 (しらい・たかし)
株式会社 白井隆庭園都市計画設計事務所
代表取締役

1955年神奈川県出身。慶應義塾大学経済学部卒業。
個人邸から公共施設、田園の景観の設計・施工を手がけている。また、現在英国で最も話題を集める庭園再生「ヘリガン庭園」と、世界最大の温室を使っ
てつくられた植物のテーマパーク「エデン企画」の紹介にも尽力。著書に「庭の旅」(TOTO出版)ほか多数がある。

住まいと暮らしを庭園から発想する時代

—先生の著書『庭の旅』のなかで「庭園に暮らす」というフレーズが印象に残りました。

白井(隆) 「庭園に暮らす」というのは、私たちのキャッチフレーズですが、決して口先だけではないのです。80年代後半インテリアのバブルがあり、国民的には世界で最高水準のものを「触る」くらいの機会はありました。その後ガーディングブームになったわけですが、ガーデンに対する高い要求にどう応えるか、ということなのです。応え方はいっぱいありますが、その基本は「外観は庭園のために」。ある集合住宅でいま実際に行っているんですが、ファサード(正面)も、エントランスも、外にみえるものはすべて庭園のために発想する。ここはしっくい、ここはタイルというふうに、庭園のために景色を変え、ストーリーの文脈を変えるんです。

永田 それは面白いですね。いままでの建築は自己主張が強く、あまりにも不揃いで街並みの景観を考えていないものもありましたからね。美しい街並みには、せめて道路ぎわの美しいラインづくりが必要だと思うんです。1本の本木では「並木」になりませんが、木も塀も道に沿って連なり、ラインになれば、「美しい街」が誕生しますからね。

白井(隆) 施主の要望で建築設計もするようになったのですが、施主は建物を、こちら(庭園)側から発想してくれるのを待っていたということがよくわかりました。最近では私のように外構から建築、そしてランドスケープまで全部やるデザイナーも増えてきました。外構のデザイナーが、庭園側から一歩先に建築をデザインして提案し、施主が喜んでくれる、デベロッパーも動く。これからもっともっとそういう働きかけをしていきたいですね。

永田 その昔、人々は自分の住まう土地に住居を建てましたね。まず敷地があって、その庭に住まうということ。この「庭に住まう」という視点が、美しい街並みをつくる。これは我々エクステリア業界の役割でもあり、業界の地位向上のための課題でもありますね。

ヨーロッパと日本の庭・根源を学ぼう

—世界の庭をご覧になると、どういうところに日本との共通点や違いがありますか？

白井(隆) ヨーロッパは「田園への憧れ」という文化があります。「田園の生活を理想とした生活のかたち」をヴィラというんですが、ヴィラの文化は日本にも通じる場所がありますね。その潜在的な憧れを、意識させて実現するのが私のライフワークです。ただ、不動産会社が漠然と「畑つき別荘」などを企画していますが、亭主がいない間に友達と外国旅行してきた奥さんたちは、そんな付け焼き刃の畑つき別荘になんて絶対に住まないですよ(笑)。

—女性の間では、ひところ流行ったイングリッシュガーデンのように、洋風の庭が人気ですが。

白井(温) 文化というのは自然そのものなんです。イギリスは地形が緩やかで、気候も緩やかで、雨も日照量も少ないんです。でも日本の自然は複雑で一瞬のうちに変わってしまう、そういう自然なんです。イングリッシュガーデンがいいからと

て、日本人が持っていた自然観を捨て、自分たちの生活習慣をなくして、イギリスのものを形だけまねても意味がないんです。異文化から学ぶなら、表面ではなく根源的な本物に学ぶべきですね。

伝統を見直し、飾るまえに掃除を

—流行と伝統の間で迷っている女性もいます。ゴールドクレストを植えてみたけれどちょっと違う。でも昔の日本の庭には戻れない。自分の庭はどこにあるんだろうと。

白井(温) 何事も「自分流」の時代になりましたが、若い人の知恵ですべてがうまくいくものではありません。長年かかって先人が培ってきた知恵は大切です。普段は気がつかなくても、親から、職人から教わった「土台となる空間」はあるんです。庭は、日本の深い自然と住宅をつなぐ役割を担っています。刻々と変化する自然の細やかな味わいは、日本独自のもの。「大きなところは風土に寄り添って、小さなところに自分たちの味つけを」が理想ですね。そうでないと自分自身が住みにくくなると思うんです。

永田 日本にはもともと培われた文化がある、それを壊すのではなく、尊重しながら、自分らしさを出していくということですね。

白井(温) そうですね。若い奥様たちは、むやみに流行ものを買う前に、いま持っているものにどれだけ手をかけているか…。たとえば、お掃除しただけで「自分の雰囲気」って出るんです。何年か前まで色とりどりの花を植えたガーデンをつくっていた奥様が、ストレスでやめてしまって、野山のような庭にしてしまったんです。でも、そこを掃除するだけで安らぐと言うんですね。「お掃除してこんなに和むなんて」と。ですから、むしろ「飾る前にお掃除を」と考えたほうが本当に自分らしい庭が見つかると思いますね。

「夫は玄関、妻は庭の仕上げ」で丸くおさまる

永田 女性の視点で庭を考えることはありますか？

白井(温) 家の要は女性だから、同じ居るなら楽しいほうがいいですよ。たとえば台所に勝手口があって、すぐ外に自分の大好きなこじんまりしたガーデンが1坪でもあったら、女性はとても楽しいんじゃないかと。家事をしていても、「ありのままの自分」でいることが楽しく感じられるような庭をつくれなかなと。それは男性にはなかなか理解してもらえないので、私が女性の立場で考えてあげたいですね。

白井(隆) 古くさいようですが、「門と玄関はご主人の顔、主庭、裏庭は奥様の世界」というお宅は、おさまりのいいエクステリアができますね。フロントガーデンはフォーマルで、スタンダードが決まっている。要するに人に見せる対社会的な顔なので「うちはこのぐらいの格だから常識にのっとって」と。いま手がけている鎌倉のお客様だと、「門というのは、笠があって屋根があって、紅葉と松があって」とご主人。奥様は「私は松はいらないんだけど」と言いながらもご主人の意向通りに。で、裏は畑などにして奥様の世界に。こういう役割分担はやっぱり大切ですね。

大きなところは風土・文化に寄り添って、
小さなところに自分たちの味つけを。
そうでないと自分自身が住みにくくなると思います。



ガーデンデザイナー
白井 温紀氏 (しらい・はるき)
有限会社 白井温紀 ガーデンデザイン事務所
代表取締役社長

長野県出身。跡見学園女子大学文学部美学美術史科卒業。英国The Inchbald School of Design卒業(90~91のGarden Design Prize受賞)。2003年より英国王立園芸協会日本支部コンテナガーディング協会専門講座の講師を務める。住宅の庭を中心に大小さまざまな庭のデザイン・施工を手がけている。NHK衛星第2テレビ「私のガーディング」などテレビ・ラジオ出演、講演・翻訳・執筆など幅広く活躍。



第1回東京ガーディングショーのテーマガーデン「心の中の鎌倉」で手がけた「洗濯物の似合う庭」(右)と「食卓を囲む——台所続きの庭を楽しむ」。(白井温紀氏)



白井温氏が総合プロデューサーとして企画した2000年の第1回東京ガーディングショー。1ヶ月の入場者数は89万人を超え、ガーディング文化の歴史を変えたと言われ、賞賛。



同ショーで提案した、植物を育てることの好きな老婦人の「おばあさんの庭」。長年培われてきた知恵から学んで庭の暮らしを楽しんでほしい。(白井温紀氏)